

*Emplacing East Timor:
Regime Change and Knowledge Production, 1860–2010*
(University of Hawai'i Press, 2024)

土 屋 喜 生

京都大学東南アジア地域研究研究所 助教

緒 言

地域研究というフィールドは、ある空間を地域として認識した上で、その地域内部の共通性や他地域と比較した場合の独自性を理解することをひとつの目標としている。しかし、そもそも我々は、どのようにして地域・領土・島等のような場所を識別認識し、関連する知識を生産してきたのだろうか。また、場所に関するこのような知識が歴史の中で果たす役割とはどのようなものだろうか。

本研究は、（東）ティモールという場所（そしてその前身たる様々な政体や地域の観念）に関する知識の総体としての（東）ティモール論を史学史研究・グローバルヒストリーのケースとして取り上げる。その上で、（東）ティモールに関する知識の生産やその変遷を方向付けて来た様々な要因（戦争、政権交代、学術研究のトレンド、国際関係、個々人の知識生産者のコミュニティやネットワーク等）を分析し、また知識が歴史の中で果たす役割を分析する。

本研究を開始する前の2000年代末、筆者は独立後の東ティモールの国連選挙支援チームに勤務する機会があった。当時の東ティモール政府と国際連合は、「5世紀間のポルトガルによる植民地支配、24年間のインドネシアによる不法占領、3年間の国連暫定統治を経て、2002年に東ティモールは独立した」という独立前後に形成された歴史観を宣伝していた。このような歴史観は、1970年代から90年代にかけて、東ティモールの独立運動家や国際人権活動家たちが、東ティモールを併合・占領していたインドネシア軍に対抗するために作り出した東ティモール論を簡略化したものである。

しかし、草の根の東ティモール人たちの認識は、政府や国連と完全に一致したものではなかった。2006年には暴動があり、ティモール人同士での戦闘が発生していた。また数千人の平和維持軍の兵士たちが駐屯してお

り、国際公務員が起こす事件や社会問題への不満も蓄積していた。「真の内的な独立が達成されるまでは闘争は続いている」ことを主張し、国連主導の選挙をボイコットする村落や団体も存在した。そして、新たな体制に対して武力闘争を続けていた組織の多くは2015年までに政府軍によって掃討された。つまり、筆者は所謂「東ティモール独立史」が新しい国民国家の建国神話として定着するプロセスに参加することとなったのだが、建国神話の不完全性やそれに対抗しようとする人々の記憶や願望をも目の当たりにしたのである。

本研究は、近現代の（東）ティモール論の総体が、現実の戦争や政権交代との関りの中でどのような変遷を辿っていったのか、そして多種多様な（東）ティモール人や海外の知識人によるティモール論はどのようなものだったのか、を主な問いとしている。また、各国の知識生産者たちが作り出してきた（東）ティモール論、彼（女）らを取り巻く職業的利害・分析概念や観点・歴史的事件、力関係等を批判的に検討した上で、現在の多様な（東）ティモール論の源泉となった海外の、あるいは草の根の東ティモール論を検討する。そしてこのような短期主義的・世代的バイアスを越えて通用するティモール島史の長期的な継続性、緩慢な変化、構造、現在に残る課題はどのようなものなのかを浮き彫りにしようとしている。

方 法

筆者は、東ティモール、インドネシア、ポルトガル、オランダ、オーストラリア、日本等、同地域の支配に関わった諸勢力の第一次史料と共に、さらに多様な国々の草の根の知識人や知識生産者たちによる第二次史料を研究した。これらの史料の著者たちは、国籍においてだけでなく、生きた時代、使用した言語、職業、ティモール島とのかかわり方や分析概念に至るまで実に多様な人々

であるが、ティモールとその住民たちについて科学的、あるいは政治的に重要な知識や認識を作り出したと言う点を基準に研究対象として選定した。またつながりや結節点を重視するグローバルヒストリーの観点とともに、エドワード・サイードやアン・ローラ・ストーラー等のコロニアル理論家たちが実践してきた対位的読解、レイナルド・イレート等が用いた下層の人々の精神史の方法等を応用し、読解手法として用いた。

考察と結論

まず、近現代のティモール島史においては、約一世代ごとに人口の数割を減少させる大規模な国際戦争や内戦を繰り返してきたことがわかった。その原因は単なる外部勢力による侵略や住民同士の恨みの蓄積だけではなく、ティモール島内政治の構造的な要因があることが発見された。

19世紀中頃までのティモール島における戦争は、比較的小規模であり、その多くは個人やコミュニティの栄光、略奪や奴隷化、同盟相手の保護やより好都合な相手との同盟関係の組み換え等を目的とするものだった。しかし、ポルトガルとオランダによるティモール島の分割や領土化が進んだことにより、2つの管轄区とルーズな国境管理、海外勢力の戦略に組み込まれたティモール人の国際戦争への参加という現代まで続くティモール島政治の構造が成立した。島内に2つの管轄区が存在することにより、犯罪者や反政府勢力は、国境の抜け穴を利用して移住することで訴追や弾圧を避けようとする傾向を持つようになった。それにより、20世紀初頭にポルトガルによる大規模な「平定戦争」が行われた際には、多くの住民がオランダ領西ティモールに移住した。

ディアスポラが成長したことは戦争にも影響を与えた。第二次大戦中、連合軍はポルトガル領の住民をゲリラ戦闘員として雇用、日本軍に抵抗した。これに苦戦した日本軍は、対抗策としてオランダ領西ティモールの難民グループを兵補として訓練した上でポルトガル領でのさらなる動員や戦闘に導入した。1970年代にインドネシア軍がポルトガル領ティモールを侵略した際にも、1999年から2007年頃に東ティモールが独立国家として成立していく過程でも、ディアスポラのティモール人たちが政変や戦闘に参加するという現象が起きた。いずれの戦争でも、国際紛争がティモール人同士の内戦や競争に変化したのである。

同時期の（東）ティモール論の変遷を辿っていくと、

上記の戦争と政権交代のサイクル及と共にパラダイムの変化を経験してきたことが明らかになってきた。19世紀中頃まで、ティモール島は西洋人にとってほぼ未踏の地であり、例えばアフォンソ・デ・カストロ総督は、植民地化を内陸部へと進めるという目的のためにポルトガルと平地・内陸部のティモール人コミュニティとの関係史を執筆した。また、当時の西洋人にとっての支配的な分析概念は人種であり、ティモール人はマレー系、パプア系、交雑人種だとされた。

20世紀初頭に列強による平定戦争が完了すると、形質人類学やオランダ領東インド史等の学問分野において、ティモール島とその住民を完全に組み込むことが可能になった。ポルトガルの形質人類学者たちは、戦争で負け、植民地支配の被支配者となった住民たちを身体測定し、人種のヒエラルキーにおける「下位人種」と位置付けた。また、オランダの東インド史家達は、オランダとインドネシアとの関係、植民地支配の中心であるジャワ島と周縁のティモール島というメタ地理学的ヒエラルキーの中に配置した。

このような植民地主義的ティモール論の状況は、第二次大戦中の連合軍と日本軍による侵略によって大きく変わる。ティモール人たちの外部勢力への協力、戦闘参加やティモール島統合運動、そしてイベリア系ポルトガル人の暗殺事件等が相次いだことにより、ティモール島のポルトガル人たちは、住民に恨まれれば自分たちの生存とポルトガルの領土が危険に晒されると認識した。戦後、ポルトガルは、「忠実なティモール人」によって「分離主義者（外部勢力への協力者）からポルトガルの主権と領土が守られた」ことを強調し、「ティモール人もまたポルトガル人」であることを強調するようになった。また、世界的な反植民地主義的ナショナリズムの高揚に対して批判を回避するという目的も重なり、1951年にポルトガルは憲法を改正し、「植民地」を「海外県」とした。

ポルトガルが多人種国家として再定義された1950年代以後の時期に、新たなポルトガル人としてのティモール人論を展開したフェルナンド・シルヴァンのような知識人たちが登場する。現在の東ティモールの国家神話においてシルヴァンは、東ティモールの抵抗詩人として記憶されている。しかし、1960年代まではポルトガルの多様性の未来像、多様性の体現としてのティモール人、そしてイベリア半島と海外県の摩擦などをテーマとする親ポルトガルのエッセイストであった。また75-76年

頃に彼は東ティモールナショナリズムに同調していくが、実は彼が自分の故郷と呼んでいたのは、インドネシア領西ティモールのクパンからポルトガル領東端のラウテムまでであり、東ティモールの領土というよりはティモール島であった。

領土に基づくナショナリズムとしての東ティモール国民論が登場したのは、ポルトガルによる脱植民地化宣言やインドネシア軍による侵略が起きた1970年代以降である。1974年のティモール人の政党の登場により、冷戦論理や脱植民地化思想等の国際的に流通していた言説を借用しつつ、かつて抑圧されていた様々なティモール人の政治思想が表舞台に登場した。特にナショナリスト政党であるフレテリンがテトゥン語で表現したウクン・ラシック・アン (ukun rasik an) という将来達成されるべき独立国家のイメージ—母が子を産むように、血族集団によって内的な痛みを通して達成される独立—は、現東ティモール政府の建国神話の元となっただけでなく、今も現状に抵抗を続ける集団や一般の人々の思想を

意図せぬ形で喚起し続けている。

ディアスポラ、日本軍への協力者、ポルトガル化された層、インドネシアによる教育を受けた層、そして政治エリートとは異なる独立思想等、その時々権力が抑圧してきた願望や思想は、形を変えて次の時代に現れてきている。重層的な過去と、グローバルな繋がり、積み重ねは、独立後の東ティモールの多様な思想の現在の中に凝縮されている。

謝 辞

このたび荣誉ある三島海雲學術賞をいただきましたことに対し、理事長はじめ財団関係者の方々、選考委員の先生方、またご推薦いただきました東南アジア地域研究研究所の三重野文晴所長及び東南アジア学会の小林知会長に厚く御礼申し上げます。また私の生活や研究を支え、励ましてくださった全ての方々に心より御礼申し上げます。

著者紹介



土屋 喜生 (ツチヤ キシヨウ)

〈略歴〉

2011年3月 法政大学法学部国際政治学科 卒業
2013年2月 シンガポール国立大学人文社会科学部東南アジア研究科 修士号取得
2018年6月 シンガポール国立大学人文社会科学部歴史学科 博士号取得
2019年4月 シンガポール国立大学人文社会科学部歴史学科 ポスドクフェロー
2021年10月 京都大学東南アジア地域研究研究所 助教

〈研究テーマと抱負〉

専門分野：東南アジア史、比較アジア研究、グローバルヒストリー
各国の知識人の思想や一般の人々の経験を掘り起こし、世界史における彼らの役割について語ってきました。特に東南アジアの紛争地域について、作り出されたイメージと実情とのズレ、それが歴史叙述や現地の社会、国際政治に与える影響を分析してきました。